神の建造のための祭司職の回復

（土曜日――夜の部）

メッセージ　6

神の福音の労苦する祭司となって、わたしたちの霊の中で、御子の福音において神に仕える

聖書：ローマ 1:9．15:16．16:25

Ⅰ．「それは、わたしが異邦人へのキリスト・イエスの奉仕者となり、神の福音の労苦する祭司となるためであって、ささげ物である異邦人が聖霊の中で聖別されて、受け入れられるためです」――ローマ 15:16：

A．パウロが神の福音の労苦する祭司となってキリストを異邦人に供給したことは、神に対する祭司の奉仕でした。そして彼が福音の宣べ伝えを通して得た異邦人は、神にささげられたいけにえでした――Ⅰペテロ 2:5：

1．この祭司の奉仕によって、汚れた不潔な多くの異邦人は、聖霊の中で聖別されて、神に受け入れられるそのようなささげ物となりました――ローマ 15:16．16:4-5。

2．これらの異邦人は、世俗的な事物から分離され、神の性質と要素で浸透され、こうして地位においても性情においても聖別されました。そのような聖別は聖霊の中にあります――6:19．15:16。

3．聖霊はキリストの贖いに基づいて、キリストの中へと信じることによって再生されている人を更新し、造り変え、分離して聖とします――3:24．12:2．ヨハネ 3:15。

B．パウロは福音の祭司の模範です。神の福音に関するローマ人への手紙の中で、彼がわたしたちに告げているのは、どのようにして罪人が主を信じることによって救われ義とされることができるか、どのようにして彼らが聖別され造り変えられることによってキリストの中で前進するか、どのようにして彼らが自分自身を生きた犠牲として神にささげ、キリストのからだの肢体となって召会生活をし、団体的にキリストを表現して、彼の来臨を待ち望むかということです――Ⅰテサロニケ 2:1-12．使徒 20:17-36．ローマ 1:16-17．3:24-26．12:1，4-5．13:11。

C．神によって定められた新約の奉仕は、すべての信者が祭司となって、神が願っているささげ物をもって神に仕えるということです――啓 1:5-6．5:9-10．Ⅰペテロ 2:5，9：

1．わたしたちは神の福音の祭司であり、救われた罪人を、拡大された団体のキリストの一部分として、いけにえとして神にささげます――

6．神の福音の労苦する祭司となって、わたしたちの霊の中で、御子の福音に……

ローマ 15:16。

2．信者たちを神にささげることには三つの段階があります：

a．福音を宣べ伝える人は新しく救われた人を、霊のいけにえとして神にささげます――16 節．Ⅰペテロ 2:5。

b．新しい信者たちは成長して、キリストにある信者とは何であるかを理解し始めた後、励まされて、自分自身を生きた犠牲として神にささげます――ローマ 12:1。

c．信者たちが成長し続けて円熟へと至るとき、彼らの上で労苦する人は、キリストの中で完全に成長した彼らをささげます――コロサイ 1:28。

D．わたしたちは福音の祭司として機能するために、神の福音がローマ人への手紙全体を含むことを見る必要があります。この書簡がわたしたちに見せているのは、わたしたちが福音を宣べ伝えるとき、罪人を神の子たちまたキリストのからだの肢体とし、彼らを助けて成長させ、彼らが諸地方召会においてからだの生活を実行する中で、活動的な肢体となることができるようにするということです――1:16-17．3:24．5:10．8:16．12:2，4-5。

E．福音の祭司の体系の奉仕は、キリストのからだとしての召会の奉仕です。わたしたちの奉仕の中心は、罪人を救って神にささげることであり、わたしたちの奉仕の目標は、キリストのからだを建造することです――15:16．12:4-5．Ⅰペテロ 2:5，9．エペソ 4:11-12，16。

Ⅱ．「わたしがわたしの霊の中で、御子の福音において仕えている神が、わたしの証人なのです」――ローマ 1:9：

A．新約で啓示された信者たちに関するすべての要求のために、特に神の福音を告げ知らせるために、わたしたちは手順を経た三一の神の分与を通して、からだの神聖な供給を受ける必要があります――エペソ 3:2．ヘブル 4:16．ローマ 5:17，21．ヨハネ 7:37-38．使徒 6:4．ピリピ 1:5-6，19-25。

B．わたしたちは、福音において神に仕えることが、神を礼拝することであることを見る必要があります。新約で、神に仕えることは、実は神を礼拝することと同じです――マタイ 4:9-10．雅 1:2．参照、詩 2:11-12：

1．パウロは、テサロニケの信者たちが、「偶像から神に向きを変えて、生けるまことの神に仕えるようになった」と言いました――Ⅰテサロニケ 1:9：

6．神の福音の労苦する祭司となって、わたしたちの霊の中で、御子の福音に……

a．わたしたちの日常生活のあらゆる面で、神はわたしたちに対して、またわたしたちの中で生きていなければなりません。わたしたちの思想や動機のような小さな事柄においてさえ、神がわたしたちを管理し、指示し、矯正し、調整するという事実は、彼が生きていることの証明です――ピリピ 1:8. 2:5, 13. 1:20。

b．わたしたちは生ける神の管理、指示、矯正の下で生活して、わたしたちが伝える喜ばしいおとずれの模範となります――Ⅰテサロニケ 1:5-8. 2:10. Ⅱテサロニケ 3:5。

c．わたしたちはキリストにある信者として、霊の中で生活して、わたしたちが礼拝し仕えている神が、わたしたちの生活の詳細の中で生きているという証しを担わなければなりません。わたしたちがある事を行なったり言ったりしないのは、神がわたしたちの中で生きているからであるべきです――ローマ 8:6, 16。

2．ローマ第 1 章 9 節の「仕えている」のギリシャ語は、「礼拝の中で仕える」を意味し、それはマタイ第 4 章 10 節、Ⅱテモテ第 1 章 3 節、ピリピ第 3 章 3 節、ルカ第 2 章 37 節でも使われています。パウロは彼の福音の宣べ伝えを、単に働きだけではなく、神に対する礼拝と奉仕と考えました。

3．わたしたちは来て神に仕え、あるいは神を礼拝するとき、血できよめられた良心を必要とします。わたしたちの汚れた良心はきよめられる必要があります。それは、わたしたちが生きた方法で神に仕えることができるためです――ヘブル 9:14. 10:22. Ⅰヨハネ 1:7, 9. 使徒 24:16. 参照、Ⅰテモテ 4:7。

4．福音において神に仕えることは、すべてを含むキリストの中で神に仕えることです。なぜなら、福音はまさにキリストご自身であるからです――使徒 5:42. ローマ 1:3-4. 8:29。

5．わたしたちは神の御子の福音を宣べ伝えるために、再生された霊の中にいなければなりません（1:9）。ローマ人への手紙でパウロが強調したのは、わたしたちであるすべて（2:29. 8:5-6, 9）、わたしたちが持っているものすべて（10, 16 節）、神に対して行なうことすべてが（1:9. 7:6. 8:4, 13. 12:11）、わたしたちの霊の中になければならないということです。

6．パウロは、彼の再生された霊の中で、内住のキリスト、すなわち命を与える霊によって神に仕えたのであり、彼の魂の中で、魂の力や能力

によって神に仕えたのではありませんでした。これが、彼の福音の宣べ伝えにおける第一の重要な項目です。

７．パウロは神の福音へと選び分けられました。この福音はローマ人への手紙の主題です。ローマ人への手紙は第五の福音書と考えられることができます――1:1．2:16．16:25：

ａ．初めの四つの福音書は、肉体と成ったキリスト、すなわち肉体の中のキリストが、彼の弟子たちの間で生活したことに関してです。ローマ人への手紙における福音は、復活したキリストがその霊として、彼の弟子たちの内側で生活していることに関してです――8:2，6，9-11，16。

ｂ．わたしたちは第五の福音書、ローマ人への手紙が、わたしたちの内側の主観的な救い主を、キリストの主観的な福音として啓示することを必要とします。

ｃ．ローマ人への手紙の中心的なメッセージはこれです。すなわち、神が渇望しているのは、肉体にある罪人を霊の中の神の子たちへと造り変えて、キリストのからだを構成し、諸地方召会として表現されるようにすることです――29 節．12:1-5．第 16 章。

ｄ．わたしたちはみなローマ人への手紙の啓示にしたがって、神の福音の祭司として機能する必要があります。わたしたちは福音の要素と詳細を学ぶ必要があり、福音の完全な内容を経験する必要があり、わたしたちの霊を活用して、どのように福音を供給するかを学ぶ必要があります――15:16。

Ｃ．「わたしたちこそ割礼の者であり、神の霊によって仕え、キリスト・イエスの中で誇り、肉を頼みとしていない」――ピリピ 3:3．参照、ローマ 2:28-29：

１．肉は、わたしたちの天然の存在の中でわたしたちであること、わたしたちが持っているものすべてを指しています。天然のものは何であれ、それが善くても悪くても、肉です――ピリピ 3:4-6。

２．わたしたちはキリストにある信者として、自分の天然の誕生によって持っているものの何にも信頼すべきではありません。なぜなら、わたしたちの天然の誕生のものはすべて、肉の一部分であるからです。

３．わたしたちは再生されていても、堕落した性質の中で生き続け、肉において行なうことの中で誇り、自分の天然の資格を頼みとしているかもしれません。ですから、わたしたちが深く個人的に、ピリピ第 3 章

のこれらの節に触れられることは重要です。

４．わたしたちは、主の光がわたしたちの性質、行為、肉を頼みとすることに対して、わたしたちを照らすことを必要とします。わたしたちは主に照らされて、自分がまだあまりにも肉によって生きていること、自分の行為と資格の中で誇っていることを見る必要があります。

５．わたしたちは、主の光がわたしたちを照らして、わたしたちが自分の天然の特質、資格、能力、知力に信頼しないことを必要とします。こうしてはじめて、わたしたちは、完全に主を頼みとしていると証しすることができます。わたしたちはこのように照らされた後、真にわたしたちの霊の中で、またその霊によって神に仕え、神を礼拝します——7-8 節。

６．ある日、光がこれに関してわたしたちを照らすとき、わたしたちは主の御前にひれ伏して、自分の性質がいかに汚れているかを告白したくなります。そしてわたしたちは、自分の堕落した性質によって行なうあらゆる事を罪定めします。わたしたちは、神の目に、堕落した性質の中で行なわれることが何であれ、邪悪で罪定めされるべきであることを見ます。

７．以前、わたしたちは自分の行為や資格の中で誇っていましたが、肉と肉の資格を罪定めする時が来ます。その時わたしたちはただキリストの中で誇り、自分自身の中では誇る立場が完全にないことを認識します。

８．わたしたちは神に照らされてはじめて、自分の天然の資格、能力、あるいは知力に信頼しないと真に言うことができます。その時はじめてわたしたちは、完全に主を頼みとすると証しすることができます。わたしたちはこのように照らされた後、真にわたしたちの霊の中で、その霊によって神に仕え、神を礼拝します。

Ｄ．福音における主のためのわたしたちの働きと労苦は、わたしたちの天然の命と天然の能力によるのではなく、主の復活の命と力によります。復活は、わたしたちが神に仕えることにおける永遠の原則です——民 17:8. Ｉコリント 15:10, 58. 16:10：

１．命を与える霊は、三一の神の実際、復活の実際、キリストのからだの実際です——ヨハネ 16:13-15. 20:22. Ｉコリント 15:45 後半. エペソ 4:4。

２．復活が意味するのは、あらゆる事が神からであって、わたしたちから

ではないこと、神だけができて、わたしたちはできないこと、あらゆる事が神によってなされ、わたしたち自身によってなされないことです――民 17:8。

３．復活を知るすべての人は、自分自身に絶望しています。彼らは自分ができないことを知っています。死のものはすべてわたしたちに属し、命のものはすべて主に属します――Ⅱコリント 1:8-9．参照、伝 9:4。

４．わたしたちは、自分が無であり、何も持たず、何もできないことを承認しなければなりません。わたしたちは自分自身を終わらせ、自分が全く無益であることを信じなければなりません――出 2:14-15．3:14-15．ルカ 22:32-33．Ⅰペテロ 5:5-6。

５．復活したキリストは、命を与える霊として、わたしたちの中に生きて、わたしたちが自分自身の中で決してできないことを、行なわせることができます――Ⅰコリント 15:10．Ⅱコリント 1:8-9，12．4:7-18。

６．わたしたちは、自分の天然の命によって生きず、わたしたちの内側の神聖な命によって生きるとき、復活の中にいます。この結果は、神の福音の目標としてのキリストのからだの実際です――ピリピ 3:10-11．エペソ 1:22-23。

務めからの抜粋：

新約における福音の祭司の唯一の模範

新約における福音の祭司の唯一の模範は、使徒パウロです(Ⅰテモテ 1:16)。わたしたちは、どのようにしてパウロが福音の祭司として彼の働きを行なったかを見る必要があります。新約の記録によれば、彼はそれを三つの段階のささげることにおいて行ないました。第一に、パウロは罪人を救い、彼らを神に受け入れられる犠牲としてささげました(ローマ 15:16)。第二に、彼は信者たちを育て、彼らを導いて、自分自身を生きた犠牲として神にささげるようにしました(ローマ 12:1)。第三に、彼は知恵を尽くしてすべての聖徒を戒め教え、キリストの中で完全に成長したすべての人をささげました(コロサイ 1:28-29)。彼がこれを行なったのは、彼の中で力をもって働く神の活動にしたがって、労苦し奮闘することによってでした。コロサイ人への手紙第 1 章 28 節でパウロがキリストを告げ知らせることは、キリストを告げることです。キリストの中で完全に成長したすべての人をささげることは、キリストの中で完全に成長したすべての

人をささげることです。

罪人を救い、彼らを神に受け入れられる犠牲としてささげる

ローマ人への手紙第 15 章 16 節によれば、パウロは救われた罪人を、神に受け入れられる犠牲としてささげました。不信仰の罪人はみな、アダムの中にあります。わたしたちが彼らに福音を宣べ伝え、彼らが主を受け入れるとき、彼らはアダムからキリストの中へと移されます。人はキリストの中へと信じるとき、キリストの一部分となります。キリストの中へと移される未信者は、キリストの増し加わりです。わたしは福音を宣べ伝えて救われた人たちを神にささげているとき、キリストを、すなわち個人のキリストではなく団体のキリストをささげています。旧約で、祭司は雄牛や雄やぎを犠牲としてささげました。神はこれを喜ばれました。なぜなら、それらは来たるべきキリストの予表であったからです。今日、新約時代におけるわたしたちの働きは、福音を宣べ伝えて罪人を救い、彼らをキリストの一部分とすることです。わたしたちがこれらの人を神にささげるとき、神は彼らをキリストの一部分と考えます。こうして、わたしたちはキリストの増し加わりを神にささげているのです。わたしたちはキリストの肢体ですから、わたしたちはキリストであると言うことができます。パウロはピリピ人への手紙第 1 章 21 節で、「わたしにとって生きることはキリストであり」と言いました。わたしたちは神にささげられたとき、キリストとして神にささげられたのです。

旧約の祭司が神にささげた雄牛と雄やぎは予表でした。それらは実際ではありませんでした。これらのささげ物の実際はキリストです。神は旧約のささげ物に幸いでした。なぜなら、それらは来たるべきキリストを指し示したからです。しかし今日、わたしたちは予表をささげる祭司ではありません、わたしたちは実際をささげます。その実際は、何の拡大も増し加わりもない個人のキリストご自身だけではありません。わたしたちはキリストの増し加わり、キリストの各部分をささげています。わたしはとても幸いです。なぜなら、わたしの務めを通して長年にわたり、わたしは何千もの人々を、受け入れられる犠牲として主にささげてきたからです。わたしは主に会うとき、何千ものご自身の各部分を彼にささげてきたという精算をすることができます。わたしたちは、キリストのどれほどの部分を主にささげたのかを考える必要があります。わたしたちはみなこの質問に答えなければなりません。ある日わたしたちは主に会い、そしてこの地上で

のわたしたちの生活と労苦について、彼に精算をしなければなりません。キリストのどれほどの部分を彼にささげたかは、わたしたちがどれほど労苦したかを示します。

パウロは福音における彼の労苦について語るとき、コロサイ人への手紙第 1 章 29 節で言いました、「このために、わたしもまた労苦し、わたしの内で力をもって活動している彼の活動にしたがって、奮闘しているのです」。キリストの各部分を神にささげることは、わたしたちの労苦を必要としますが、わたしたち自身の力や、わたしたち自身の能力による労苦ではありません。わたしたちは、わたしたちの内で力をもって活動している彼の活動にしたがって、奮闘する必要があります。わたしたちは神の新約の福音の祭司ですから、罪人の上で労苦し、神を彼らの中へと分け与え、神を分与して彼らをキリストの中へともたらし、彼らをキリストの各部分とし、受け入れられる犠牲として神にささげなければなりません。わたしたちはみな新約の祭司として、これを行なう義務があります。ある日わたしたちはみなキリストの裁きの座の前に現れ、主に精算しなければならないでしょう。

わたしたちは福音の宣べ伝えのために人々のドアをノックすることについて話すとき、それは人々を訪問することを意味します。わたしたちは人々を訪問して、キリストを彼らの中へと分け与えます。人々を訪問してキリストを彼らの中へと分け与えることは、わたしたちのクリスチャンの日常生活の一部分でなければなりません。わたしたちは日常生活において、神を他の人の中へと分け与えキリストを分与して、彼ら罪人をキリストの各部分とし、神の大いなる喜びのためにこれらの各部分を犠牲として神にささげなければなりません。これはキリストの肢体を生み出して彼のからだを構成し、最終的にこのからだを生み出して、地上で多くの地方において表現されるでしょう。

信者たちを育て彼らを導いて、
自分自身を生ける犠牲として神にささげさせる

パウロは罪人を救った後、続けて新しい信者たちを養い、わたしたちが自分の子供を育てるのと同じ方法で育てました。わたしたちは子供を育てるとき、まず彼らに行なうことを教え、そしてある期間の後、自らそれを行なうように命じます。救いの時、パウロは救われた罪人を犠牲としてささげました。そしてパウロは彼らを育て導いて、自分を生きた犠牲として

ささげさせました。

わたしが罪人に福音を宣べ伝え、彼が救われるとき、彼は今やキリストの中にあります。わたしはこの人をキリストにあって、キリストと共に、キリストの一部分として、霊の犠牲として神にささげます。今や彼は救われて、キリストにある赤子です。わたしは彼を独りにしておくべきではなく、養う母親として彼を養わなければなりません。ローマ人への手紙第 1 章と第 2 章で信者が罪人であることを啓示した後、パウロは第 3 章から第 11 章でこの養う働きをしました。次にローマ人への手紙第 12 章で、養う者であるパウロは聖徒たちに、自分を生きた犠牲として神にささげるようにと懇願しました。パウロはローマ人への手紙第 1 章で聖徒たちに、彼ら自身を神にささげるよう懇願しませんでした。十一の章にわたる彼の交わりの後はじめて、彼はローマ人への手紙第 12 章で聖徒たちに、自分自身を生きた犠牲として神にささげ、彼の奉仕する肢体となるようにと求めることができました。わたしたちは自分を直接、神にささげなければなりませんが、これを行なうのは、宣べ伝える使徒によって助けられ、成就されることによります。これは、わたしたちが従わなければならない模範です。

人々が主を命として受け入れるとき、彼らは赤子です。ある期間キリストで養われた後、彼らは命において成長し続け、霊的に言って、十代になります。家庭で、親は小さい子供に多くの責任を与えることはできませんが、後ほど親は、彼らの成長の段階に応じて事を行なうよう命じることができます。子供は十三歳になるとき、小学校を出て中学校に入ります。パウロのローマ人への手紙第 12 章 1 節の命令は、「小学校」を出たばかりのものです。初歩の教えはローマ人への手紙第 1 章から第 11 章にあります。ローマ人への手紙第 12 章 1 節は、今や「十三歳」の者たちへの命令と考えられるでしょう。ローマ人への手紙第 1 章から第 11 章の長い教えの後、子供たちは「中学校」に入りました。パウロは彼らの回心の時、彼らを犠牲として神にささげました。今や彼らは「十代」であるので、彼は彼らに自分自身を神にささげ、自分の体を生きた犠牲として神にささげるようにと懇願します。

ローマ人への手紙第 12 章におけるこのささげることの後、からだの生活の実行が始まります。聖徒たちは自分を神にささげた後、キリストのからだの活動的な肢体となることができます。こうして、第 12 章の続く節で、自分を生きた犠牲としてささげる人たちが、キリストの有機的なから

だの機能する肢体となることを見ます。これらの生ける肢体は彼らの賜物に応じて、預言や教えることなどのように機能します(6-7 節)。

ローマ人への手紙第 12 章の前に、からだの生活の実行はありませんでした。第 12 章に始まって、聖徒たちは成就され始めてからだの生活を実行しています。聖徒たちは成就された後、賜物のある人たち、すなわち使徒、預言者、伝道者、牧する者また教える者と同じ働きをするでしょう(エペソ 4:11-12)。たとえ聖徒たちがこれらの特別な賜物ではないとしても、これらの賜物が行なうのと同じ働きを行なうでしょう。この働きは新約の務めの働きであり、キリストのからだを建造することです。キリストのからだは、成就された聖徒たちによって直接、建造されるのであり、成就する賜物によるのではありません。このからだは諸地方召会として、この地上の多くの地方において建造され、表現されます。

知恵を尽くしてすべての聖徒たちを戒め教え、キリストの中で完全に成長したすべての人をささげる

信者たちはまだ完全に円熟していないので、新約の祭司職におけるパウロの福音の働きの第三段階があります。この第三段階は、コロサイ人への手紙第 1 章 27 節から 29 節で見ることができます、「神は彼らに、異邦人の間にあるこの奥義の栄光の豊富がどんなものであるかを、知らせたいと願われました．それはあなたがたの内にいますキリストであり、栄光の望みです．わたしたちはこのキリストを告げ知らせ、知恵を尽くしてすべての人を戒め、すべての人を教えています．それはわたしたちが、キリストの中で完全に成長したすべての人を、ささげるためです．このために、わたしもまた労苦し、わたしの内で力をもって活動している彼の活動にしたがって、奮闘しているのです」。パウロは、どのようなキリストを告げ知らせたのでしょうか？　彼が告げ知らせたキリストは簡単ではありません。彼は栄光の望みとしての内住するキリストを告げ知らせました。パウロはすばらしい方を告げ知らせました。栄光の望みとしてのキリストは、パウロのような働き人なしに、完全にわたしたちの中で働くことはできません。

「戒め」という言葉は、わたしたちがなし得ることに混乱、問題、困難、間違いがあることを暗示します。ですから、わたしたちは戒められる必要があります。戒めはまた警告や叱責(しっせき)を暗示します。パウロは知恵を尽くしてすべての人を戒め、教えました。「知恵を尽くして」とは、パウロが一人

の人にある方法で、他の人に別の方法で戒め、教えたことを意味します。彼はすべての人を面と向かって戒め、教えました。パウロがこうしたのは、キリストの中で完全に成長したすべての人をささげ、あるいは提示することができるためでした。パウロはだれをも失いたくなく、完全に成長したすべての人をささげることを願いました。

使徒行伝第 20 章でパウロは、公にも、また家から家でも聖徒たちを教えたと言いました(20 節)。彼はまた三年間、夜も昼も涙をもって、聖徒たち一人一人を訓戒したと言いました(31 節)。パウロは聖徒たちの家に行って、彼らを一人ずつ教え、訓戒しました。わたしは長年アナハイムに住んでいますが、聖徒たちの家庭を訪問しに行ったのはごくわずかです。わたしはこれについてとても申し訳なく感じます。わたしたちは伝統的な観念のゆえに、奉仕においてそれていました。パウロは、公に教え、また家から家でも教えたと言いました。ギリシャ語の「家から家へ」は、「家々にしたがって」を意味します。パウロは聖徒たちと面と向かって教え、訓戒し、戒めました。このように家から家で教えて聖徒たち一人一人を訓戒することによって、パウロはキリストを聖徒たちに供給し、彼らを命において成長させました。

旧約で、完全に成長した祭司は三十歳でなければなりませんでした。二十五歳の人は、祭司職の見習い、学ぶ者でしかあり得ませんでした。主イエスが彼の務めを開始されたのは、およそ三十歳(ルカ 3:23)、神の奉仕のための完全な年齢の時でした(民 4:3 、35 、39 、43 、47)。わたしたちは知恵を尽くして人を戒め教えることによって、彼らの上で労苦し、彼らがキリストの中で完全に成長するに至る必要があります。わたしたちは実に多くの方法で、すなわち、知恵を尽くして各自を戒め、各自を教えます。完全に成長した、円熟した聖徒たちは、キリストの有機的なからだの活動的な肢体、キリストの各部分となります。言い換えれば、彼らはみな団体のキリストとなります。キリストの中で完全に成長した聖徒たちをささげることは、団体のキリストをささげることです。そのような状態において、彼らは完全にキリストの各部分、団体のキリストの構成要素となりました。

わたしたちはキリストの中で完全に成長していないので、なおも知恵を尽くして戒められ、教えられる必要があります。わたしたちは団体のキリストの各部分であると言うかもしれませんが、日常生活において実行上、彼の各部分であるでしょうか？　団体のキリストの各部分が罪深いことや

この世的なことに携わると、あなたは信じるでしょうか？　わたしたちのある者は、ローマ人への手紙第 12 章 1 節の段階、自分の体を生きた犠牲としてささげる段階に成長したかもしれません。しかしながら、ローマ人への手紙第 12 章 1 節は、まだ完全に成長した段階ではありません。わたしたちは、わたしたちを取り扱う祭司たちに助けられ、成長して、コロサイ人への手紙第 1 章 28 節の完全な成長へと至らなければなりません。わたしたちを取り扱い、キリストを供給する使徒たちは、団体のキリストの各部分として、キリストの中でわたしたちを神にささげることを願っています。

パウロは、奮闘することによってこのために労苦したと言いました。奮闘するというギリシャ語は、戦うこと、闘争すること、あるいは格闘することを意味します。キリストの中で完全に成長したすべての人をささげることは、容易ではありません。パウロが労苦したのは彼自身の能力や強さにしたがってではなく、彼の内で力をもって活動しているキリストの活動にしたがってです。キリストの内住することは、彼がわたしたちの内で力をもって活動し行動することができるためです。ここの力はダイナミックな力です。キリストはわたしたちの中で働いておられますが、わたしたちは日ごとに日夜、生ける方キリストがわたしたちに内住し、わたしたちの内側で活動しておられることを認識し、感じているでしょうか？

わたしの身近な何人かの人は、わたしが老齢の自分自身を顧みるようにとわたしに思い起こさせます。わたしの身近な人たちがわたしのために心配するのはわたしを愛しているからですが、別の方もわたしを愛しておられます。この内なる方はまた、絶えずわたしの内側で活動しておられます。毎回わたしは彼の活動に従うなら、活気づけられます。わたしは主のために語れば語るほど、ますます強くなります。わたしたちは、自分の天然の強さにしたがってではなく、わたしたちの内で活動する方にしたがって、奮闘することによって労苦する必要があります。わたしたちは内住のキリストの活動と協力する必要があります。神は彼の新約エコノミーを遂行するために、事を成し遂げられました。彼は確かに彼の側の働きを完成して、わたしたちのためにあらゆることを行なわれました。今や彼はわたしたちの内で活動して、わたしたちを活気づける祭司としつつあります。わたしたちは、わたしたちの分を顧み、わたしたちの義務を果たさなければなりません。わたしたちは、自分は弱い、自分は無である、何もできないと感じるかもしれませんが、わたしたちが進んで活動する限り、彼はわ

たしたちの活気づける力となられます。わたしたちが進んで事業をしようとする限り、彼はわたしたちの資本であるでしょう。彼にとっての問題は、わたしたちが進んで彼と協力しないことです。

主は新約のわたしたちに、彼の選ばれた民はすべて、今日の信者であり、彼の祭司であると告げられました（Ｉペテロ 2:5、9．啓 1:6．5:10）。どの祭司も怠惰であることはできません。なぜなら、あらゆる祭司は、日ごとに何かをささげなければならないからです。あらゆる祭司は犠牲を神にささげることで、とても、とても勤勉で、進取的でさえなければなりません。神は、祭壇上のささげ物のかぐわしいかおりが止まるのを願われません。彼はこのかぐわしい香りが絶えず彼に立ち上って、彼が受け入れことを好まれます。ローマ人への手紙第 15 章 16 節でパウロは、自分は諸国民へのキリスト・イエスの奉仕者であり、神の福音の活気づける祭司であって、諸国民を神にささげると言いました。新約の祭司の主要なささげ物は、拡大された団体のキリストの各部分としての救われた罪人であって、新約の福音の犠牲として神にささげられるべきです。旧約で、主要なささげ物は雄牛や雄やぎであり、それらはキリストの予表でした。今日わたしたちはキリストをささげつつありますが、それは個人のキリストではありません。わたしたちは団体のキリストをささげつつあるのです。

このようなささげ物は絶えず継続すべきです。わたしたちは新約の祭司として、福音の宣べ伝えをわたしたちの日ごと生活、わたしたちの日ごとの歩みの一部分としなければなりません。祭司の日ごとの生活と日ごとの働きは、犠牲を神にささげることです。旧約で、祭司は一日中、朝も夕も雄牛や雄やぎをささげました。これは、わたしたちが行なうべきことの予表です。わたしたちは新約の祭司として、再生され、聖別され、造り変えられ、キリストのかたちに同形化されさえした罪人をささげるべきです。わたしたちはこれらの人を団体のキリストの各部分として神にささげるべきです。わたしたちは、信者としてわたしたちは祭司であること、祭司は常に何かを神にささげていることを忘れるべきではありません。パウロは、彼が救った罪人を絶えず犠牲として神にささげていました。

わたしたちは、ローマ人への手紙第 12 章 1 節を経験したかもしれませんが、コロサイ人への手紙第 1 章 28 節の完全に成長している状態にはまだ達していません。キリストの中で完全に成長して神にささげられることは、新約の祭司の体系が犠牲を完了する最後の段階です。この犠牲は三つの段階を必要とします。すなわち、ローマ人への手紙第 15 章 16 節におけ

る救い、ローマ人への手紙第 12 章 1 節における命の成長、コロサイ人への手紙第 1 章 28 節における命の中の円熟です。このすべての段階は、新約の福音の祭司職の働きです。神聖な啓示によれば、罪人を救うこと、聖書を教えること、聖徒たちを啓発すること、諸召会を設立することはすべて、福音の働きです。神の福音の宣べ伝えは、神の新約エコノミーを遂行する新約の務めです。わたしたちは神の大いなる喜びのために、この責任を担わなければなりません。

わたしは長年、多くの聖徒たちと共にありました。そして、彼らが主を愛していることを知っています。彼らは毎年、定期的に集会に来ます。彼らは主のために多くをささげます。この書で、わたしは真の負担を持って、すべての聖徒たちに、わたしがここで教え宣べ伝えていることが絶対に新しいことを告げます。大部分のクリスチャンの実行は、わたしたちを含めて、何世紀もの伝統の積み重ねにしたがっています。わたしたちが実行してきたものは、部分的に聖書にしたがっており、部分的に聖書にしたがっていません。わたしたちはみな召会生活とクリスチャンの奉仕を実行する伝統的で非聖書的な方法によって引きずられてきました。わたしたちは冷静になって、聖書が言っていることを再考慮する必要があります。わたしたちは聖なる御言だけをわたしたちの基礎とするべきです。

わたしたちの今日の福音の宣べ伝えは、新約における福音の祭司職でなければなりません。神の福音は、新約における使徒たちの教えにしたがっており、神の新約エコノミーすべてを包含します。旧約の祭司たちは雄牛と雄やぎをささげたとき、これらの犠牲が予表するのは、肉体と成ることにおける、人の生活における、すべてを含む死における、命としての復活における、命を与える霊としてわたしたちに来てわたしたちに内住することにおける、昇天における、下って来て救われた者と一になり、彼らを一つのからだとすることにおけるキリストであることを、彼らは認識しませんでした。旧約の祭司たちはこれを認識しませんでしたが、わたしたちはこの現在の新約の時代にいるので、それを認識するべきです。

もしこれらの事柄を知らないなら、わたしたちは不完全です。主はこのすべての事柄をわたしに見せてくださったので、わたしには負担があります。わたしは他のどの働きも顧慮しません。わたしはすべての聖徒たちに、これらの新しい見たもの、これらの新しいビジョン、これらの新しい光を提示する負担があります。神の福音の祭司に関する真理は、わたしには完全に新しいのです。わたしは六十年以上も聖書を教えてきましたが、

６．神の福音の労苦する祭司となって、わたしたちの霊の中で、御子の福音に……

この点は過去のわたしの文書のどこにも見いだすことはできません。主に感謝します、わたしはこの事柄を見て、それをすべての聖徒たちに提示することができます。（主の今日の回復の前進、第２章）